

<季語>数は少ないもののミカンやカキがSHCには植えられていて今が花の時です。しかし地味なためかウメやモモのように“花盛り”とは言いませんね。ミカンの白い花は花卉が厚く“繊細な感なし”ですが甘い香りがして「ミカンの花が咲いている思い出の……」(みかんの花咲く丘)という唱歌を思い出させます。一方、カキは花も青い実もほとんど気に留められません。果実が色づいて初めて俳句の季語としても“人権?”を得ます。でもカキの花はよく見ると“赤ちゃんがクリーム色のヨダレ掛けを付けて大きなへタの上に座っている”ように可愛く、また幾何学的な感じもします。

(俳句の季語) ウメ、モモは春、ミカンは夏の季語で花の頃、一方カキは秋の季語で果実の時期です。

<白い花>前号で紹介したヤマボウシの花は今も遠くから目立ちます。背の低いウツギも昨年の実を付けたまま白い花を一杯に咲かせ始めました。エゴノキの房状の白い



<マルバウツギ>



<エゴノキ>



<シロバナタツナミソウ>

花も見事です。林の木漏れ日の下ではコゴメウツギとマルバウツギが控え目に花を付けています。草花では白い花の少ない時期ですがビオトープでシロバナタツナミソウを見つけました。一株だけで“立浪”のイメージは残念ながらありません。

(エゴノキ) 果実はとても苦い(エグイ)のでこの名があります。若い実はサポニンを多く含むため石鹸の代用にし、また魚毒があるため“毒流し漁”に使ったようです。

<念願叶う>この2ヶ月ほどビオトープと遊水地でシュレーゲルアオガエルの合唱や輪唱を日々耳にしてきました。何とかその姿を見たいものだと目を皿のようにして、また双眼鏡も持ちだし、何人かの人の目も借りて探したのですが“声はすれども姿は見えず”でした。ところが強力な助っ人のおかげでとう



とう目にすることができました。写真(上)のように完全な保護色です。ところで鼻の高いのがシュレーゲルアオガエルで低いのがニホンアオガエルです。

<嫌われ者の芸術作品>生垣にしているアカメモチの赤い若葉と緑の葉の間に古色豊かな“素焼きのトックリ”(左)が逆さにぶら下がっていました。ちょっとした刺激でトックリの口から現れたのはコスズメバチです。残念ながらすぐに処分…。

(文と写真: 松本正勝)